

2021年12月19日
宮崎中部教会クリスマス礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書9：5～6

マタイによる福音書2：1～12

「喜びにあふれた」

<王さまが生まれた>

みなさん、クリスマスおめでとうございます。今日は、神の御子イエスさまが、わたしたちの救いのためにお生まれになったことを感謝し、神さまをほめ讃える日です。

みなさんと共に、クリスマスを喜び、礼拝をささげることが出来ることを、心から感謝いたします。

今日の聖書には、「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった」とあり、具体的な時と場所が記されています。それは、この人類の歴史の中に、この世界の地上に、イエスさまが確かにお生まれになった、ということです。

また、この「ユダヤのベツレヘム」という場所には、特別な意味があります。

ユダヤのベツレヘムは、かつてイスラエルの王であり、権勢を誇った、あの有名なダビデ王の町です。神さまは、このダビデ王の裔から救い主が誕生するということを、イスラエルの民に預言しておられました。

ですから、イスラエルの子孫であるユダヤ人たちは、ダビデ王の血統から、救い主が自分たちのために与えられることを信じ、今か今かと待ち望んでいたのです。

そしてイエスさまは、まさに、そのダビデの町で、またダビデの子孫であるヨセフの子として、神さまが遣わして下さると約束しておられた「救い主」として、お生まれになったのです。

イエスさまは、神の御子であり、救い主であり、わたしたちを支配なさる、まことの王です。先ほど読まれた旧約聖書のイザヤ書9章は、まさにこの救い主であり、まこと王である方の誕生を、預言している箇所でした。もう一度お読みしますのでお聞き下さい。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君』と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」

イエスさまこそ、このように預言され、わたしたちのためにお生まれになった「ひとりのみどりご」、「ひとりの男の子」です。そして、正義と恵みによって、今もそしてとこしえに、王国を立てられ、支えられる、まことの王なのです。

<あなたの王さま>

さて、今日のマタイによる福音書は、この、神さまが与えて下さったまことの王、救い主イエスさまを、「あなたたちはどのようにお迎えしますか」ということが問われています。

もしかすると、イエスさまは遠い昔のユダヤ人の中の話であって、2000年後の、日本の宮崎にいるわたしたちには何の関係もない、と思われる方があるかも知れません。

しかし、神さまは旧約聖書を通して、このユダヤ人の中からお生まれになる救い主は、時も場所も超えて、世界のすべての人を神さまの救いへ招く、と告げておられます。

今日のところでは、イエスさまにお会いしたくて、東の方からエルサレムにやってきた占星術の学者たちが登場します。彼らは、こう尋ねました。2節「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

彼らは、遠い東の国、つまり異国からやってきた異邦人、外国人です。そして、お生まれになったイエスさまを「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」と言って探しています。しかし、彼らはその方を拝みに来た。つまり、自分たちの王として拝むために、会いに来たのです。

神さまは、ユダヤ人のダビデの子孫の中から、世界のすべての人を救うため。ユダヤ人も、この東の国の学者たちも、今ここにいるわたしたちをも救うために、神の御子イエスさまをこの世に遣わして下さいました。

ですから、わたしたちもまた、このイエスさまを、わたしたちの救い主として、わたしたちの王さまとして、受け入れることへと招かれているのです。

<不安を感じる者>

さて、今日の箇所では、イエスさまの誕生にあたって、まことの王を前にした人間の、対照的な二つの態度が示されています。この方を王として拝み、喜び、贈り物を献げた者たちと、この方を王と受け入れられず、不安に思い、抹殺しようとした者たちです。

[ヘロデ王]

まず、不安を覚えた者たちから見てみましょう。マタイの1～3節にはこうあります。

「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。」
「ユダヤ人の王」の誕生に不安を覚えたのは、ヘロデ王と、エルサレムの人々です。

まずヘロデ王ですが、彼は時の権力であるローマ帝国から、ユダヤ地方を治める権威を与えられた、雇われの王さまです。つまり彼こそ、一時的とはいえ、実際のこの時代の「ユダヤ人の王」だったのです。しかし、その王の地位は、とても不安定なものでした。

ですからヘロデは、自分の王位を守るためなら、親族を殺すことも厭いませんでした。実際、何人も殺害したり処刑したりしたようです。ヘロデは王の立場を、自分の力で必死に維持しようとしていました。そうして、力と暴力で王の座を築き、守り、ユダヤ人たちを支配していたのです。

そんな、実際のユダヤ人の王であるヘロデの前に、東の方から占星術の学者たちが来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と尋ねてきたのです。これは聞き捨てならない話です。それに、ちょっと学者たちも遠慮がない人たちですね。

とにかくそれで、ヘロデは不安に思いました。それは、ベツレヘムに生まれた幼子が、やがて自分の王座を奪うのではないかと思ったからです。

結局、ヘロデはあれこれ聞き出したり調べたりして、最終的には、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を一人残らず殺させました。それは、マタイ 2 章 16 節以下に語られていることです。邪魔だから亡き者にする。これが、自分以外の王を受け入れようとしなかった者の、神の御子イエスさまに対する態度でした。

[エルサレムの人々]

さて、さらに 3 節には「エルサレムの人々も皆」ヘロデ王のように不安を抱いた、とあります。実は、これはちょっと不思議なことではないでしょうか。

なぜなら、エルサレムの人々とは、ユダヤ人、つまり神の民イスラエルの子孫であり、旧約聖書の預言もよく知っており、救い主、まことの王を待ち望んでいたはずだからです。それにユダヤ人たちは、ローマ帝国の手先であるヘロデ王の支配を喜んではいませんでした。

その中で、まことの王がお生まれになった。救い主が生まれた。このような知らせを聞いたなら、異邦人である学者たちよりも先に、エルサレムの人々こそ喜んで、急いで、真っ先にイエスさまを拝みに行くべきではないでしょうか。

しかし、彼らは不安に思いました。それは、どうしてなのでしょう。

エルサレムの人々は、救い主を待ち望んではいました。そして、ヘロデ王の支配を快くは思っていませんでした。しかし恐らく、それなりの落ち着いた生活が続いていました。その生活に慣れて来ると、今度人々は、変化することの方を恐れたのではないのでしょうか。

自分の生活、自分の人生が、脅かされなければそれで良い。現状維持が出来れば、まあ良い。自分なりにそこそこ満足し、充実しているのであれば、何か大きな変化を受け入れるよりも、多少の不平不満はつぶやきつつも、変わらないことの方が、楽ちんで安心です。

今の自分の状況も落ち着いてはいるし、将来のことも、大体の計画を立て、予想がつく。むしろ変化することや、自分で立てた予定が崩れてしまうことに、不安を覚えるのです。

[自分を王とすること]

ユダヤ人の王がお生まれになった。まことの王がお生まれになった。

神さまは、罪に捕らわれ、神さまから離れ、神さまの思いに背いて滅びに向かう人々を救い出すために、イエスさまをお遣わし下さいました。そして、すべて人々が、このまことの王さまを受け入れ、自分の王とし、神さまの愛と恵みの支配に生きることを、望んでおられます。わたしたちが、神さまと共に生きる者へと変わることを。それが、神さまの思いです。

しかし、エルサレムの人々は、神さまの思いよりも、自分の思いの方が大切なのです。変わりがたくないので。自分は変わらないで、神さまの方が自分に都合よく動いて下さるのなら良いのでしょうか。しかし、自分が従う者となることには、抵抗があるのです。神さまに支配されるより、自分で自分を支配し、自分で自分の思い通りに生き、自分で自分を守る方が、安心安全だと思っているのです。ここに、すべての人の、神さまに対する罪があります。

わたしたちはみな、自分の思いが中心です。自分の望みに忠実です。しかし、本当は、自分の思い、自分の望みを、自分で守ることによって得る平安は、依り頼むにはあまりに頼りなく、維持するにはあまりに脆く、壊れやすいものなのです。

ですから、わたしたちは、自分の願いの実現のために、自分の立場を守るために、互いに傷つけあったり、必死になって競争したり、自分より弱い人に無関心になったりするのです。

まことの王を受け入れるということは、自分が自分の王であることをやめる、ということなのです。まことの王、つまり神さまの思いに従うとは、自己中心的な自分の思いに従うのを止める、ということです。

しかし、自分こそが自分の支配者であると思うなら。自分の思いを中心に歩みたいと願うなら。神さまの存在、まことの王の存在は邪魔になります。実際に、エルサレムの人々もやがて、彼らの王であるイエスさまを、十字架の死へと追いやっていくのです。

<東方の学者たち>

さて、ヘロデやエルサレムの人々とは対照的なのが、東方の占星術の学者たちです。彼らは星を読む知恵ある人たちで、古い訳では「東方の博士」と言われていました。

この、異国の地の、まことの神さまを知らない人々が、星に導かれて、まことの王、救い主の誕生を知り、その方を拝みにやって来たのです。

この学者たちには、様々な伝説があります。よくクリスマスの絵本や劇などで、「三人の博士」とされているのは、イエスさまへの贈り物が、「黄金、乳香、没薬」の三つだったので、三人だったのではないかと考えられたからです。それに、実はこの三人は、三つの大陸の王たちで、世界のすべての人々を代表しているとか、三つの人種、三つの世代の代表だ、という説もあります。興味深いことですが、それは聖書には載っていないことです。

しかし、まずユダヤ人ではなくて、異邦人である彼らが、幼子イエスさまを、自分たちの王として拝んだ、というのは意味深いことです。それは、まさにイエスさまが、ユダヤ人だけの王ではなく、世界の人々のまことの王であることのしるしに他なりません。

9 節以下にはこうありました。「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」

彼らは喜びにあふれました。ここは、直訳すれば、「非常に大きな喜びを、喜んだ」となります。喜びの爆発です。遠い東の国の彼らは、自分たちのまことの王を求めて、長い長い旅をし、導きの星を与えられ、いよいよその出来事が確かであることを知り、大いなる喜びに包まれたのです。

そして彼らは、まことの王、幼子イエスさまと出会い、拝みました。異国の大の大人が、伝説によれば、もしかすると王のような立場であるかも知れない彼らが、家畜小屋で生まれ、飼い葉桶に寝かされている幼子を拝んだ、というのは、とても不思議なことに思われます。

しかし神さまは、求める者には、与えて下さるお方です。神さまは、求める者には、はっきりと導きを示して下さり、イエスさまと確かに出会わせて下さり、この方を「わたしの王」「わたしの救い主」として受け入れる信仰を与えて下さるお方なのです。

そしてそれは、わたしたちも同じではないでしょうか。2000 年前に、遠い異国の家畜小屋で生まれ、そして十字架に架けられて処刑された方を、わたしたちはどうして救い主と信じていることができるのでしょうか。どうしてこの方を、まことの王だと信じていることができるのでしょうか。

それもまた、救いを求める者に、神さまが御言葉を与え、様々な方法で導きを与え、わたしたちをイエスさまに出会わせて下さるからに、他ならないのです。

…さて、占星術の学者たちは、この幼い、しかしすべての者の王となられるお方にお会いし、ひれ伏して拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。

宝の箱というのは、保管する金庫ではなく、大切なものを常に持ち運ぶためのもので、この黄金、乳香、没薬は、実は彼らの占星術の商売道具だったと考えられています。ある説明によると、たとえば没薬は、まじないをする時のインクとして使われたそうです。

ところで聖書は、まじないや呪術、占いなどを厳しく禁じています。それは、悪いことが起きないように、良いことが起こるようにと、自分や人の将来を把握してコントロールしようとすることであり、神さまがすべてを支配し、守り導いて下さる方であることを信じない

こと。神さまに全てをお委ねしないこと。神さまを信頼していないことの表れだからです。

これまで東方の学者たちは、そのような占星術で生計を立て、自分の人生を歩んできたのでした。しかし、彼らはイエスさまと出会い、占星術に不可欠だったものを、贈り物として、喜んで献げてしまった。それは、自分の人生の拠り所を、自分の人生の中心であった最も大切なものを、つまり自分のすべてを、イエスさまにお献げしたということなのです。

なぜなら、イエスさまはまことの王であり、すべてをお委ねし、すべてをより頼むに足るお方だからです。彼らが持っているよりも更に良いものを、更にふさわしいものを、与えて下さるお方だと信じたからです。だからこそ、彼らは非常に大きな喜びを喜びつつ、すべてをお献げし、イエスさまを拝んだのです。自分たちの人生を、イエスさまに懸けたのです。

<イエスさまのご支配>

誰かがわたしの王であること。誰かがわたしを支配するということ。わたしたちは、そのことを抑圧されること、縛られること、自由を失うことと考えるかも知れません。もしその王が、この世の権力や、武力によって治める、人間の王であれば、もちろんそうでしょう。

しかしわたしたちは、神さまこそが、世界を造り、人に命を与え、わたしたちを守り、支配し、導かれる方であること。わたしたちのために遣わされた神の御子イエスさまこそ、すべての、まことの王であることを知らなければなりません。

そしてわたしたちは、イエスさまが、一体どのような王であるか、どのようにわたしたちを支配なさる方であるかを、よく知らなければなりません。

イエスさまは、わたしたちと共にいるために、低く、貧しく、小さい者としてお生まれになり、家畜小屋の飼い葉桶に寝かされた王さまです。イエスさまは、わたしたちを罪から救い、滅びから救い出すために、ご自分の命を犠牲にして、十字架に架かれた王さまです。

この方は、誰よりも低く貧しく小さくなられる王さまであり、ご自分の僕のために、自分の命を犠牲になさる王さまです。そのようにして、わたしたちを愛と憐れみの思いによって支配し、神さまの命と恵みによって包んで下さる王さまなのです。

この、イエスさまによる神のご支配に許には、抑圧や、束縛や、窮屈さなどはありません。むしろわたしたちは、愛によって支配され、確かな拠り所が与えられ、すべてを委ねることが出来る方がいることによってこそ、本当に自分らしい自由を生きることが出来るし、その恵みの中で、神さまを愛し、人を愛する、本当の喜びを知って生きることが出来るのです。

もし、揺るがない拠り所がなければ、わたしたちはいつまでも平安を得ることが出来ず、いつまでこの状況が続くのか、いつ失われてしまうのか、そうやって、いつも不安を抱えていかなければなりません。

しかし、神さまにこそ寄り頼むなら、神さまにこそ希望を持つなら。わたしたちはこの世で、どんな嵐に遭おうとも、どんな困難があろうとも、決して揺らぐことのない、失われることのない、確かな平安の中に、支えられていくことが出来るのです。

そのような平安を実現するために、まことの王、イエスさまが、わたしたちのためにお生まれになりました。そのことを覚えるクリスマス。わたしたちは、このイエスさまこそ、わたしたちのまことの王、わたしたちの救い主としてお迎えし、大いなる喜びを心から喜んで、イエスさまを拝み、心からの贈り物をお献げしたいのです。

まずわたしたちは、神さまから、素晴らしい贈り物として、まことの王なるイエスさまというお方をいただいたのですから。

【お祈り】

天の父なる神さま

クリスマス、わたしたちの救いのために、御子イエスさまを与えて下さったこと。イエスさまが、わたしたちのまことの王として来て下さったこと。そして、罪から救い、命を与え、喜びへと招いて下さったことを、心から感謝いたします。

どうか、イエスさまを、わたしたちの救い主として、わたしたちのまことの王として、心からお迎えすることが出来ますように。

わたしたちの人生を、命を、すべてお献げしても、まだ足りないほどの多くの恵みを、イエスさまはわたしたちに与えて下さいます。この時、わたしたちがこのクリスマスの非常に大きな喜びを、心から感謝して、共に喜ぶことが出来ますように。

救い主、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン